

『清須越 — 清須から名古屋へ』

2014. 6. 28

清須市 加藤 富久

1. 東海最大の弥生環濠集落の存在 (S46 貝殻山貝塚、国史跡に→S50 愛知県清洲貝殻山貝塚資料館設立 H24. 9 朝日遺跡よりの出土品 2, 028 点が国の重要文化財に指定)
2. 中世、鎌倉街道が西辺を通過 (源頼朝・足利義教通過)
3. 応仁の乱後 150 年程 尾張の中心として城下町化. その間、交通・経済・戦略的要衝として、守護斯波氏—守護代織田氏—織田信長の入城 (尾張統一 桶狭間の戦 徳川家康と同盟) — (織田信忠) — 織田信雄 (清須会議 小牧・長久手の戦、天正大地震、清須城の拡充) — 豊臣秀次 (叔父豊臣秀吉の実質直轄) — 福島正則 (秀吉の復心、三ツ蔵、関ヶ原の戦) — 松平忠吉 (家康 4 男、五条橋修築、1607 年没) — 徳川義直 (家康 9 男でまだその膝下にあり、大坂の役) といった錚々たる人物が清須城主に就任 「尾府」「清須府」
4. 清須越直前の清須城下
 - (イ) 文禄 3 (1594) 清須城下町調査で、町数 44、町家 2, 729 戸を持つ有数の町だった (『駒井日記』)
 - (ロ) 慶長 12 (1607) 清須通過の朝鮮通信使記録『海槎録』に、清須の繁栄ぶりを “天下の名城、「関東の巨鎮」と表現 忠吉附属の武家 1, 441 人 (『金府紀較』) 総人口 6・7 万と推定 (『清洲町史』)
 - (ハ) 城下町遺跡の発掘 (石垣基礎・金箔の鯨瓦・紋入瓦・鬼瓦・陶磁器・漆器・銭貨・柿経など出土品)
5. 清須越の経過 (当初、清須から見れば名古屋越)

1608 年 家康、尾張検地と御囲い堤命ず。山下氏勝の建議もあり、新城建設の沙汰 (『蓬左遷府記稿』)

1609 年 家康、義直を伴い駿府より清須城へ 名古屋築城と遷府を決定 普請奉行牧長勝ら五人と御大工棟梁中井正清・御大工頭岡部又右衛門を任命 名古屋城の地割・縄張り

1610 年 20 名の豊臣系外様大名の助役で堀・石垣造り (天下普請) 続いて天守作事へ堀川開削も始め、翌年夏には完成 清須土民社寺の移動開始

1611 年 早くも名古屋で新築家屋 150 余焼失 上洛の途次、家康・義直名古屋へ

1612 年 家康、巡見 本丸御殿築造開始。町割 天守・諸櫓ほぼ完成 “守りの城、

1613 年 諸士・町人の住居定まる 1614 年 大坂冬の陣 (義直、名古屋城より初陣) 秀忠も城内巡覧

1615 年 義直、春姫と名古屋城本丸御殿で結婚式 夏の陣で大坂豊臣氏滅亡 (元和偃武) 総曲輪は造らず

1616 年 家康死 (75 歳) 義直、母の相応院と共に駿府より名古屋城本丸に入り、翌年「御仕置始」
6. 清須越したもの
 - ① 城郭・書院・茶室・石垣・城門・蔵・屋敷・町屋・五条橋など ② 社寺 4 社 130 寺近く (東寺町・南寺町)
 - ③ 土民あげて、町家は 2, 700 とも ④ 町名 67 とも、町人の住む碁盤割に

→これだけのものが、五条川・庄内川をこえて 7 キロも先の名古屋に、短期間に、どのようにして (費用、人手、川か陸か、舟か馬か) 移動したのか? 家康の意図は? 名古屋にとって清須こそがルーツであり、“清須越”であることは、大きな誇り・ステータス (家格) となる。大都市名古屋の原点
7. その後の清須 一旦は「思いがけない名古屋ができて、花の清須は野となろう」へ
 - (1) しかし、すぐに周辺からの新田開発 (「清須新田村」) や、美濃路の整備で再出発 (1614 年小田井の青物市・1616 年清須宿・1622 年枇杷島橋の設置) し、繁栄を取り戻す (清須花火・枇杷島山車)
 - (2) 尾張藩の天明の藩政改革で、1783 年所付代官の 1 つとして清須代官所 (陣屋) が置かれ、明治初年まで、中島・春日井・海東の 3 郡にわたる 184 ヶ村、総高 147, 454 石余を支配した。
 - (3) ただ、五条川・庄内川 (小田井人足) の洪水には悩まされ、治水事業の必要は常にあり (五条川の瀬替え、新川開削、入鹿切れ、東海豪雨)
 - (4) 明治以後も交通の要地あるいは都市近郊型農業地域 (県農事試験場・養鶏試験場) として、名古屋とのかかわりは深く (ベッドタウン化) 進んできた。S19、名古屋防空のため清洲飛行場建設。
 - (5) H17. 7. 7 清洲・新川・西枇杷島 3 町合併し清須市へ→H21. 10. 1 春日町も編入→H22 (2010) 清須越 400 年 →H24. 7. 7 市立図書館開館 →H26 (2014). 5. 1 現在 人口 66, 362 人、26, 928 世帯 面積 17. 32 km²

清須越の町名

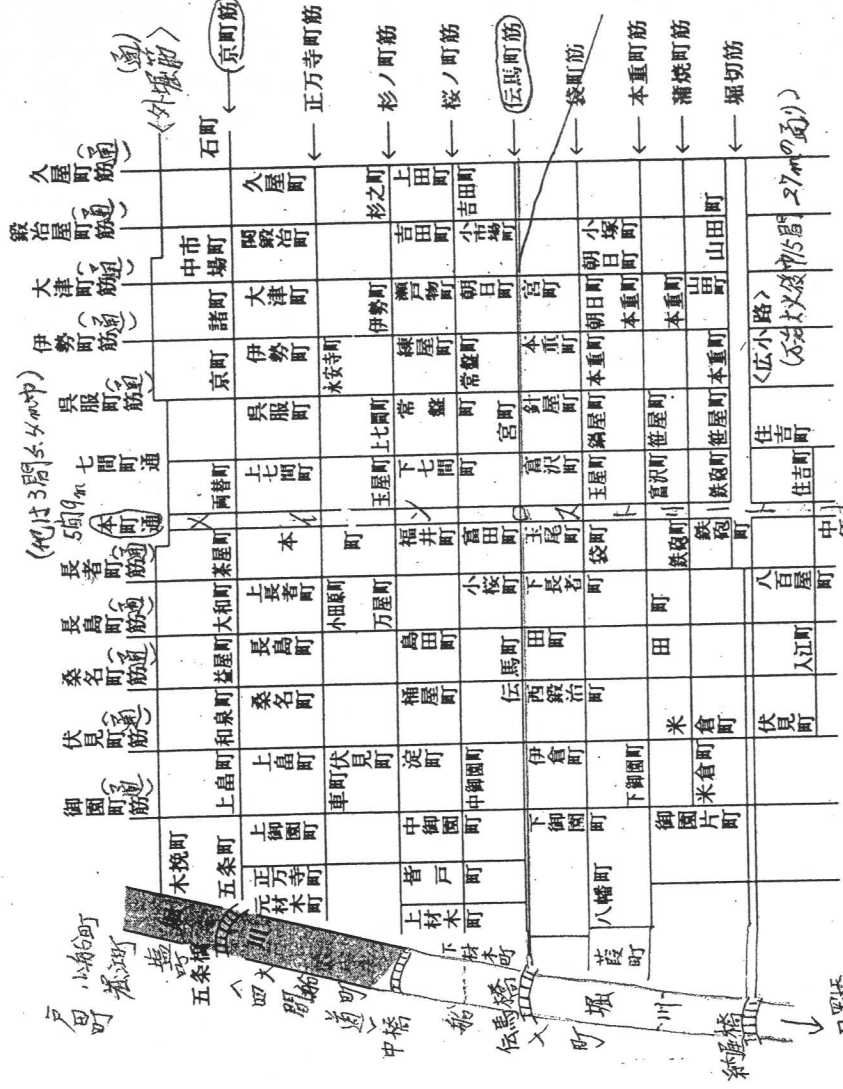
No. 1

名古歴の町名	読み方	移転年代	清須時代の町名	由来	変遷	明治以降	本町通り
1 本町	ほんまち	慶長16	本町	清須の本所、清須城の南、文禄3「駒井日記」に家数が本町20、上ノ分135、中町22軒 本町	本町	御幸本町通 S4	丸の内S41 錦 S41 栄 S41
2 福井町	ふくいちよう	"	"	本町3丁目 万治元年	福井町 貞享3.10	本町 M4	錦 S41
3 富田町	とみたちよう	"	"	本町4丁目 万治元年	富田町 貞享3.10	本町 M4	栄 S41
4 玉屋町	たまやちよう	"	下本町(しもほんまち)	清須の南部にあった 下本町	玉屋町 貞享4(宝の玉・宝珠など縁起がよい名として改)	御幸本町通 S4	
5 鉄砲町	てっぽうちよう	慶長年中	不明	清須の鉄砲師が数名移り住んだのち鉄砲師は移され跡地が町屋となった 鉄砲町		鉄砲町 M4	栄 S41
6 中須賀町	なかすががちよう	"	中須賀口町	清須城の南 文禄3「駒井日記」に家数32 中須賀口町 → 中須賀町 寛文4(口の字をはぶく)			
7 上長者町	かみちようじやまち	慶長16	長者町	本町の丘、五桑川のむかひ、清須城の南、富家が集り住んでいた 文禄3「駒井日記」に家数95 上長者町		上長者町 M4	丸の内S41 錦 S41
8 小桜町	こざくらちよう	"	"	長者町4丁目 小桜町 貞享3(霊岳院の天満天神に桜の大樹あったので)		広小路通S11	錦 S41
9 下長者町	しもちようじやまち	不明	"	下長者町			
10 長島町	ながしまちよう	慶長年中	長島町(ながしままち)	清須城の北東、朝日、一場にかけて、伊勢国(長島)からきた人々? 「駒井」に家数53あった 長島町		M4	丸の内S41 錦 S41
11 島田町	しまたちよう	慶長16	下町(けまち・げまち)	" の南、本町内須ヶ口の南、日吉神社南 「駒井」に55→清須より2戸引越し、他は諸方より集り元和には家並みをつくる		島田町 M4	錦 S41
12 田町	たまち	" 年中	野田町(のだまち)	下町	島田町 貞享元(長島町と田町に挟まる)	島田町 M4	錦 S41
13 桑名町	くわなまち	" "	桑名町	" の東、春日下之郷 朝日に続く地 野田町 → 田町(野をはぶく)		桑名町 M4	丸の内S41 錦 S41
14 桶屋町	おけやちよう	" "	桶屋町	" の北西 大海町の続きの地 伊勢国(桑名)から移った? 「駒井」に家数54 桑名町		桶屋町 M4	錦 S41
15 西鍛冶町	にしかじまち	不明	鍛冶屋町	" の北西 「駒井」の北市場桶屋町26 下町桶屋町32軒のどちらか? 清須の家柄の桶師孫左衛門が住む 桶屋町		桶屋町 M4	錦 S41
16 伊倉町	いくらちよう	"	鍛冶屋町	" 北西 桑名町の続き 「駒井」に鍛冶屋町分96と鍛冶屋町38軒の2つにあり 農工の鍛冶が住む方 東の鍛冶治町に対し西鍛冶町		伊倉町 M4	錦 S41
17 米倉町	よねくらちよう	"	鍛冶屋町	" の南 海西郡桶屋出身者が住んだという「駒井」に98軒とある 鍛冶町 → 伊倉町承応2(よびづらいので改名)		伊倉町 M4	錦 S41
18 上御園町	かみみそのちよう	慶長17	御園町(みそのまち)	下鍛冶町 → 伊倉町下之切承応2 → 下伊倉町承応3 → 米倉町貞享3(まぢがいやすいので)		上御園町 M4	丸の内S41 錦 S41
19 中御園町	なかみそのちよう	"	"	清須城の北東 御園神明の御園であった	上御園町貞享3	南園町・常盤町M11	錦 S41
20 下御園町	しもみそのちよう	"	"	「駒井」にみその町155軒・みその新町53軒とある	中御園町 "	下御園町 M4	錦 S41
21 御園片町	みそのかたまち	"	御園片町	見曾野、御園野とも書いたが、義直の命で御園町とかがせた	下御園町 "	御園片町	錦 S41
22 正万寺町	しょうまんぢちよう	"	勝万寺(勝萬寺)町	下御園町の南 西側は武家屋敷 東側のみに街並みがあったので	皆戸町 貞享4(住民が戸や障子職人だったのので)	皆戸町 M4	丸の内S41 錦 S41
23 皆戸町	みなとまち	"	"	清須城の南 天正年間、針崎の勝萬寺の通所が清須にできその門前に商家ができた 「駒井」に64軒勝萬寺町 → 正万寺町 寛永9		皆戸町 M4	錦 S41
24 下材木町	したざいもくちよう	不明	清須越町人の開発	正万寺町下ノ切	皆戸町 貞享4(住民が戸や障子職人だったのので)		丸の内S41 錦 S41
25 元材木町	もとざいもくちよう	"	清須材木町	清須の天満屋丸兵衛と川方屋弥兵衛が移住してひろく → 下材木町 安永19(京材木町である東の上材木町に対して)		木挽町M4	丸の内S41 錦 S41 栄 S41
26 葎町	よしまち	慶長16	東葎町(ひがしよしまち)	清須城南に材木屋が集まっていた清須材木町 → 北材木町寛文5(長いので) → 元材木町貞享3(「北」は逃げるの跡みをさけ)		(合併)	錦 S41

名古屋の町名	読み方	移転年代	清須時代の町名	由来	当初名	変遷	明治以降
27 船入町	ふないりちよう	慶長16	船入(舟)町	清須城の南 五条川の船入の町	船入葭町 → 船入町	船入町 承応年中	名駅 S52 名駅南 S56
28 大船町	おおぶなちよう	"	廻(船)間町	五条川(船)の舟をたつた船山をええられ果の船山として改名	廻間町 → 大船町	天和3(御船役を勤める町として改名)	名駅 S52
29 塩町	しおまち しおちよう	不明	廻間葭町(はさまよしまち)	堀川片町1丁目 → 塩町上ノ切 寛文7	塩町 貞享3(塩商人が多かった)		那古野 S52 那古野 S53 城西 S56 堀下 S56
30 堀江町	ほりえまち	"	廻間葭町の一部	堀川片町2丁目 → 堀町下ノ切 寛文7	堀江町 貞享3		堀下 S56
31 小舟(船)町	こぶなちよう	"	[清須越]	御園神明の北部 五条川河畔にあり 葭の販売した町が	御園葭町 → 小舟町	承応2(船役を務めてきたので)	堀西 S56 堀下 S56
32 戸田町	とだまち とだちよう	"	御園葭町(御園御門前)	料理人町(清須にあった町名といわれるが位置不明) → 戸田町 寛永5(海部郡戸田村の産丸助が移転してきたによる)	戸田町		堀詰町 M4 [合併]
33 上七間町	かみしちけんちよう	慶長16	七間町	富養7軒が土蔵もある初めて3階建ての家を建てたに由来する	上七間町 万治元年		丸の内 S41
34 下七間町	しもしちけんちよう	"	七間町	清須の北西部から一場にかけて	下七間町		錦 S41
35 富沢町	とみさわちよう	"	七間町の一部	伝馬袋七間町(馬持ち達がすんでいた) → 松本町 貞享3 → 富沢町 宝永5(3代尾張徳川綱誠の女機姫が松姫に改名したので)	富沢町		錦 S41 錦 S41 錦 S41
36 呉服町	ごふくちよう	慶長年中	呉服町	清須城の南部にあった「駒井」に68軒ある	呉服町		錦 S41
37 常盤町	ときわちよう	慶長14	竹屋町	本町の右の方 清須城の南 日吉神社の北 竹屋住む町「駒井」に46 竹屋町 → 常盤町 元禄14(便々出火 逆に郡むと「ヤケタ」となるので常盤町 竹は常盤木であるとして改名)	常盤町		錦 S41
38 針屋町	はりやちよう	慶長年中	針屋町(針屋小路)	清須の南 本町の右の方 竹屋町の西	針屋小路 → のち針屋町		錦 S41
39 笹屋町	ささやちよう	"	朝日八重屋敷	八重町(やえまち) → 笹屋町 元禄10 (細吉の妻女八重姫の名をさけて この北の竹屋町にちなみ笹は竹の先ということで名付く)	針屋町		丸の内 S41 錦 S41
40 伊勢町	いせまち	"	伊勢町	清須城の西 清須神明町北松原辺りにあった「駒井」には49軒とある	伊勢町		丸の内 S41 錦 S41
41 練屋町	ねりやまち	"	練屋町	" 練屋・絹屋に住んでいたに由来する	練屋町		丸の内 S41 錦 S41
42 大津町	おおつまち	"	大津町	" の北西 松原を隔て大津町の西北にあり 大津宿の四郎左衛門といふ人が移り住んで大津町と名付けた	大津町		丸の内 S41 錦 S41
43 瀬戸物町	せとものちよう	元和2	瀬戸物町	天正年間、瀬戸物を扱う商人が住みついていってうまれた たゞ位置は不明	瀬戸物町		錦 S41
44 朝日町	あさひまち	元和3	朝日村出町	清須城の北東の朝日村の出町 樹木屋敷の辺りとも	朝日町		丸の内 S41 錦 S41
45 関鍛冶町	せきかじまち	慶長15	関鍛冶町	美濃関の刀鍛冶職の者が清須に移って形成していた 位置ははっきりしない	関鍛冶町		錦 S41
46 吉田町	よしだちよう	慶長年中	下小牧町	清須より移ってきた 下小牧町	吉田町 慶安5		錦 S41 錦 S51
47 小市場町	こいちばちよう	慶長19	北市場町	清須城の北西 稲次市北市場「駒井」に49軒 北市場町 → 小市場町(いつの頃か北の略字を小と書き誤りそのままとなる)	小市場町		丸の内 S41
48 小塚町	こづかちよう	元和元年	小塚町(こづかまち)	" の南 町内に古塚(小袖塚)あり、これにちなんだとも それを略して小塚町としたもの	小塚町		錦 S41 錦 S51
49 久屋町	ひさやちよう	慶長年中	干物町(ひものまち)	" の北東 朝日 → 一場の某部にあった 干物を扱う商家が多かったことから干物町 → 久屋町(寛永頃、義直にたすねられ、以降久屋町とすべし)	久屋町		丸の内 S41 錦 S41 東 S51.55 東 S51.55 一部町名存続
50 上田町	うえだちよう	"	名古(護)屋町	" の南「駒井」に69軒あり 那古野から移り住んだ人たちが? 名古屋町 → 久屋町(城下の惣名、名古屋村もあり紛らわしい) → 上田町	上田町		丸の内 S41 錦 S41 東 S51.55 東 S51.55 一部町名存続
51 五条町	ごじょうちよう	"	上島町(うわばたまち)	" の南 すでに上・下に分れ、「駒井」に上61、下36	上島町 貞享3(五条橋に由来)		丸の内 S41 錦 S41 東 S51.55 東 S51.55 一部町名存続
52 上皇町	うわばたちよう	慶長15	上皇町(うわばたまち)		上皇町		丸の内 S41 錦 S41 東 S51.55 東 S51.55 一部町名存続
53 和泉町	いずみちよう	"	上皇町(うわばたまち)		上皇町 貞享3(泉のわくごとく商売繁昌するよう)		丸の内 S41 錦 S41 東 S51.55 東 S51.55 一部町名存続

名古屋の町名	読み方	移転年代	清須時代の町名	由来	当初名	変遷	明治以降
54 大和町	やまとちよう	元和3	[清須越]	大和町 (慶長16名古屋越築城時、朝臣中井大和が住んでいたが、元和3京都へ移ったために、東寺町住人、もと武士清須田佐治古衛門が求めて住んだ)	大和町		→茶屋町[合併]M5 → 丸の内S41
55 両替町	りょうがえちよう	慶長18	[]	両替町 (京都後藤庄三郎の通所のあったところへその後、清須から両替商9軒が移り住み名付けた)	両替町		→両替町M11 → 丸の内S41
56 京町	きょうまち	慶長年中	京町	清須本町東、日吉神社の東北、京から呉服・太物扱う商人がきて住み着いたことによる「駒井」に家数40 京町	京町		→両替町M5
57 諸町	もろまち	〃 (18とも)	片町(かたまち)	「駒井」の片新町15軒とすれば寺野地区となり、永安寺町西北の田圃ともいいう不詳、片側の町 片町→諸町 元和2(両町になったので)	片町		→石町[合併]M4 → 泉 S51
58 中市場町	なかいちばちよう	慶長14(年中とも)	中市場町(なかいちばまち)	清須に北・中・西市場あり 毎月中市場に市が立ち、川魚・塩・野菜を売買した「駒井」に57軒 中市場町	中市場町		→ 泉 S51
59 小牧町	こまきちよう	〃 16	小牧町(こまきまち)	清須城の南東・五条橋の手前 小牧街道の家並、小牧村の鍛冶職が移り町屋を → 下小牧町が吉田町になったので小牧町 慶安5	小牧町		→ 泉 S51
60 鍋屋町	なべやちよう	〃	鍋屋町(なべやまち)	清須城の南東 練物師水野太郎左衛門は鍋屋上野村の人 永禄6、信長より黒印状 文禄2、清須に移る 鍋職多し、3代目の時、名古屋へ	鍋屋町		→ 泉 S51
61 小田原町	おだわらちよう	慶長15	[清須越]	清須(鍋屋町の一部)より移り、真一丁目町→小田原町 寛永17~慶安元の間、又は承応元年(江戸の肴屋町が小田原河岸、小田原町とよばれた繁昌していたので)	小田原町		→ 丸の内S41
62 永安寺町	えいあんじちよう	慶長年中	永安寺町(えいあんじまち)	清須城の西 札之辻の西の家並、永安寺という寺の門前の町	永安寺町		→ 丸の内S41
63 万屋町	よろずやちよう	慶長17	[清須越]	「駒井」には84軒とあり 当初、二丁目町→松屋町 寛文元(金剛寺門前の古松にちなみ)→万屋町 宝永5(網蔵娘の松姫が綱吉養女になったので松の字をさけるためと多くの商人が万の物を商っていたので改称)	万屋町		→ 丸の内S41
64 伝馬町	てんまちよう	慶長15	伝馬町	清須城の西・十軒町の左 大字清洲の北西都から大字一場にかけて、上下に分れ、伝馬がおかれていた	伝馬町		→ 丸の内S41
65 宮町	みやまち	〃 年中	宮町	清須城の東 小牧町の北東(弁財天社西)「駒井」に85軒 宮町	宮町		→ 錦 S41
66 袋町	ふくろまち	〃 15	小塚袋の内	清須本町にあり 移って袋町(婦久呂町とも)という	袋町		→ 東桜 S51
67 鶴重町 (本重町)	つるしげちよう (もとしげちよう)	〃 年中	清須新町=鶴重町	清須城北西・大津町の左 ここに打物鍛冶丹羽三左衛門が住む 繁昌していたので伊勢大神宮に27度参拝し 夢想によって打物の鍛を鶴重と改め新町も鶴重と呼んだ。名古屋へ移ってもそのまま鶴重町と呼ぶ →本重町 元禄元(綱吉の娘鶴姫の名をさけて、三左衛門の先祖の法名「道本」から)→鶴重町 天保5(鶴姫もこぐり住民の願いで復旧)	鶴重町		→ 錦 S41
68 泥町	どろまち		[泥町]	31・32・59・60を入れない説もあるが入れておく 又、次の町名もかわるのか? (古清須の府に泥町と云う所あり 慶長年中、御遷城の節、其所より此地へ引越来るか不知(九十九之塵)とあり 名古屋では武家町) → 城西 S55	泥町		→ 錦 S41
69 山田町	やまだちよう		[清須越]	(清須越しの西側武家屋敷地が万治3大火で焼失・移転した その代わりに堀切筋の町屋を移して山田町と云った)	山田町		→ 泉 S51
70 石町	こくちよう		[片町の一部?]	(慶長年間、清須から移り築城の石垣の石を切った地として石町が生れた 又、鍛物商が多かったことにより石町との説あったり)	石町		→ 泉・東桜・新栄 S51
71 武平町	ぶへいちよう			(慶長遷府の時、普請奉行松井武兵衛が清須からきて住んだ 町割・屋敷地換地をしたので、武兵衛町→武平町となる 武家町)	武平町		→ 東桜 S51
72 駿河町	するがまち			(駿河と名古屋を往来する家康が岡崎からの近道として慶長17開いた駿河海道沿いの町人町)	駿河町		→ 東桜 S51
73 法華寺町・禅寺町・門前町・三ツ蔵(三ツ蔵筋・堅三ツ蔵)				あるいは長久寺町・高岳町・光明寺町・主税町(勘定奉行野呂瀬主税が住んだ)なども広く清須越といえるのか? [「旧・新名古屋市史」「なごやの町名」「清洲町史」] [「新川町史」など諸書を参考に作成]			

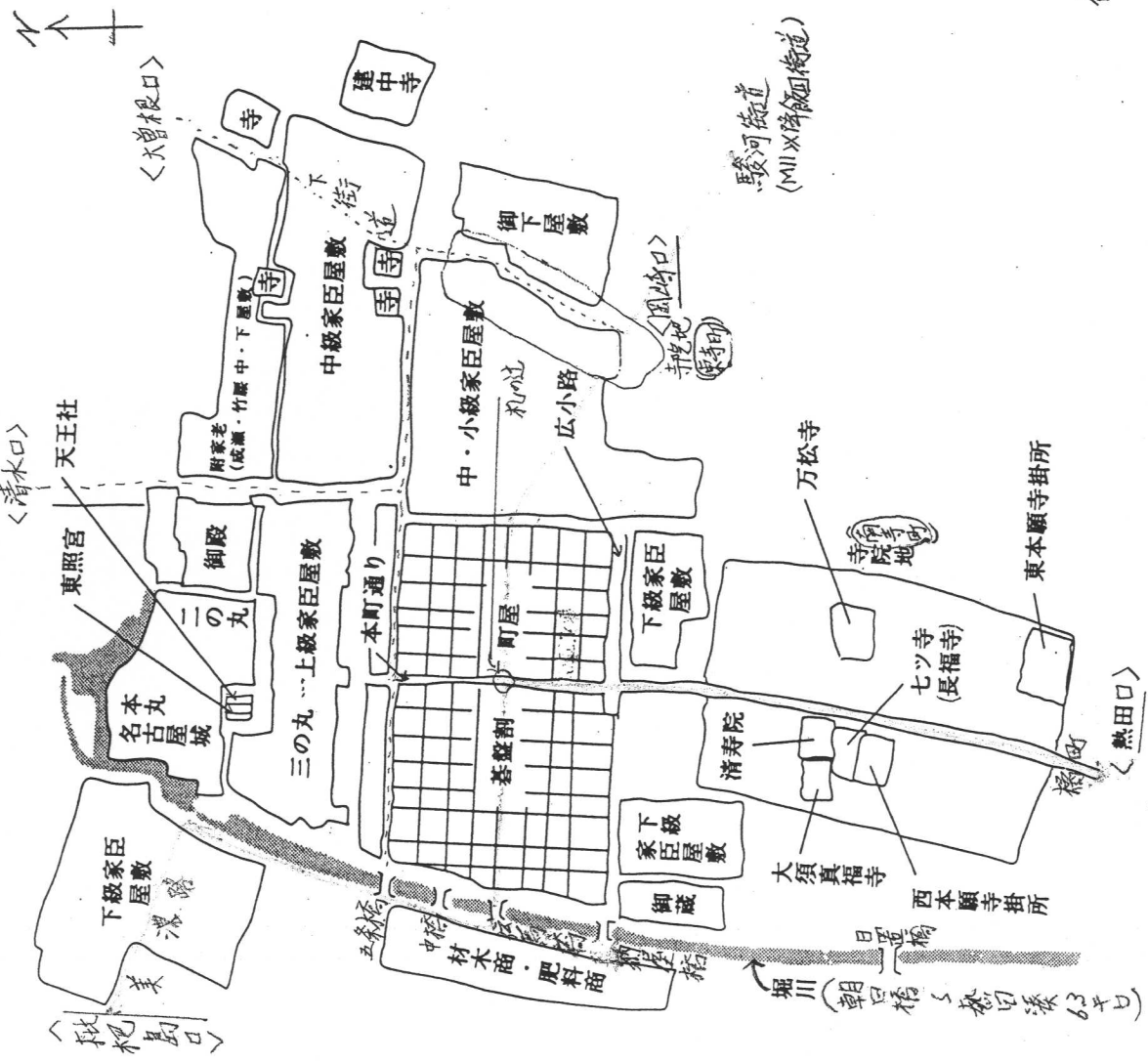
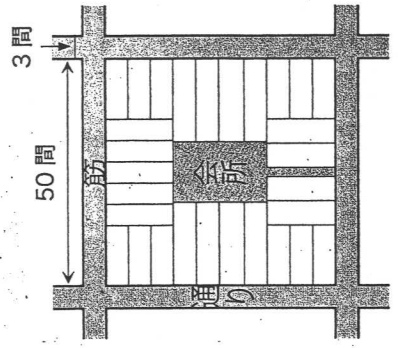
名古屋城下町略図 (碁盤割)



11 x 9 = 99区画

●碁盤割一区画の模式図

一区画は京間の50間四方で、通りの中
央部分の奥行きは20間、筋側も中央部
分で15間が一般的であった。中央に空
地ができ、ここを会所といった。



名古屋城下町略図

東海道

駿河街道 (M11) 降級細街道

合せて堀川七橋

日置橋 古渡橋 尾殿橋

戸部町 小島町 塩田町 五條町 四ノ宮町 道橋 船馬橋 伝馬橋

